

第4節 【教材4-4】 「破戒」を読む

ねらい

1906（明治39）年、信州の生んだ文豪・島崎藤村は「破戒」を自費出版しました。この小説は、当時の差別的環境のもとでの、被差別部落出身の主人公・丑松の苦悩を描いて、日本の自然主義文学の代表作のひとつと評価されています。「破戒」は、そのテーマゆえに、出版当時から大きな反響を呼び、様々な方面から論議され続けてきています。

藤村の「破戒」執筆の動機は、彼が小諸に居住していた時、実在の教員大江磯吉に対する差別事件を通して、当時の過酷な部落差別の状況を知ったことや「忍と力」の哲学を貫いた磯吉の生き方に共感したことなどによると言われています。

ここでは、青年教師・丑松の生き方を通して、明治期の厳しい部落差別の受難との闘いや人間愛の在り方を学び合ひましょう。そして、下記の「発展」などを参考にし、より広く深い視点から部落差別問題の学習に発展させたいものです。

準備 全編を通読することが望ましい。後述のあらすじも活用されたい。

展開例 次頁の教材をプリントして配り、物語のあらすじを話した後精読させ、登場人物の心情・態度等について話し合わせる。

発展 「破戒」を読み部落差別問題に関心を深めるとともに、猪子蓮太郎や主人公丑松のモデルといわれている被差別部落出身教師・大江磯吉の生涯や、彼の生きた時代状況などへ、学習を発展させたいものです。そして、その後の「水平社運動」に関わって、本書次節で取り上げる、長野県出身の女性解放運動家・高橋くら子とその時代状況の学習、また、住井すゑ「橋のない川」の読み合わせなど、様々な発展的学習が考えられます。

さらには、社会の底辺で生きる人間の醜悪さや悲惨さを赤裸々に描き、「ドレフス事件」で人種差別を鋭く批判した、フランスの自然主義小説家ゾラの作品やその時代状況の研究にまで学習を広めながら、世界史的・国際的な視点から差別問題を学び合うことも大切な視点です。

◇参考文献：「身分差別社会の真実」斎藤洋一・大石慎三郎共著1995年 講談社現代新書
「破戒の評価と部落問題」（正・続）東栄蔵著 明治図書選書
「大江磯吉とその時代」東 栄蔵著 2000年 信濃毎日新聞社
「人間の誇りうる時」中山英一著 1990年 解放出版社
「部落問題とは何か」川元祥一著 1994年 三一新書
「ケガレ意識と部落差別を考える」辻本正教著 解放出版社
「特集 『破戒』をめぐって」（部落解放 1999年 5月号）
関西大学 人権問題研究紀要（33号-1996年 35号-97年 37号-98年）
「人権感覚を深めるために」東 栄蔵著 1988年 銀河書房

「(中略)瀬川君の言はないのは、何も隠す積りで言はないのぢや無い、性分で言へないのだ。は、、、、御氣の毒な譯さねえ・・苦むやうに生れて來たんだから仕方が無い。」(中略)暫時準教員も寫生の筆を休めて眺めた。尋常一年の教師は又、丑松の背後へ廻って、眼を細くして密と臭気を嗅いで見るやうな眞似をした。

「實は・・」と文平は巻煙草の灰を落とし乍ら「ある處から猪子先生の書いたものを借りて来て、僕も讀んでみた。一體、彼の先生は奈何いふ種類の人だらう。」

「奈何いふ種類とは？」と銀之助は戯れるやうに。

「哲學者でもなし、教育家でもなし、宗教家でもなし——左様かと言って、普通の文學者とも思はれない。」

「先生は新しい思想家さ。」銀之助の答は斯うであつた。

「思想家？」と文平は嘲ったやうに、「ふ、僕に言はせると、空想家だ、夢想家だ・・まあ、一種の狂人だ。」

其調子がいかにも可笑しかった。盛んな笑聲が復た聞いて居る教師の間に起つた。銀之助も一緒に成つて笑つた。其時、憤慨の情は丑松が全身の血潮に交つて、一時に頭腦の方へ衝きかゝるかのやう。蒼ざめていた頬は遽然熱して来て睡も耳も紅く成つた。

五

「む、勝野君は巧いことを言つた。」と斯う丑松は言出した。「彼の猪子先生などは、全く君の言ふ通り、一種の狂人さ。だって、君、左様ぢやないか——世間體の好いやうな、自分で自分に諂諛ふやうなことばかり並べて、其を自傳と言つて他に吹聴するという今の世の中に、狂人ででも無くて誰が冷汗の出るやうな懺悔など書かう。彼の先生の手から職業を奪取つたのも、彼様いふ病気に成る程の苦痛を嘗めさせたのも、畢竟斯の社會だ。其社會の爲に涙を流して、満腔の熱情を注いだ著述をしたり、演説をしたりして、筆は折れ舌は爛れる迄も思ひ焦れて居るなんて・・斯様な大白痴が世の中に有らうか。は、、、、。先生の生涯は實に懺悔の生涯さ。空想家と言はれたり、夢想家と言はれたりして、甘んじて其冷笑を受けて居る程の懺悔の生涯さ。『奈何な苦しい悲しいことが有らうと、其を女々しく訴へるやうなものは大丈夫と言はれない。世間の人の睨む通りに睨ませて置いて、黙つてて狼のやうに男らしく死ぬ。』・・其が先生の主義なんだ。見給へ、まあ其主義からして、もう狂人じみてるぢやないか。は、、、、。」

「君は左様激するから不可。」と銀之助は丑松を慰撫めるやうに言つた。

「否、僕は決して激しては居ない。」斯う丑松は答へた。

「しかし。」と文平は冷笑つて、「猪子蓮太郎だなんて言つたつて、高が穢多ぢやないか。」

「それが、君、奈何した。」と丑松は突込んだ。

「彼様な下等人種から碌なものろくの生れよう筈はずが無いさ。」

「下等人種？」

「卑劣いしい根性こんじやうを持って、可厭いに憊ひがんだやうなことばかり言ふものが、下等人種でなくて君、何だらう。下手へに社會でしやばへ突出でらうなんて、斯様そんな思想かんがえを起すのは、第一おおまちがひ大間違ちがひさ。獣皮かいぢりでもして、神妙ひつこに引込んでるのが、丁度あ彼の先生せんせいなぞには適當あして居るんだ。」

「は、、、、。して見ると、勝野君かつのなぞは開化こうしやうした高尚こうしやうな人間で、猪子先生いのこの方は野蠻あな下等あな人種じんしゆだと言ふのだね。は、、、、。僕は今迄、君も彼の先生も、同じ人間だとばかり思あって居た。」

「止せ。止せ。」と銀之助ぎんすけは叱しるやうにして、「斯様そんな議論ぎろんを爲したつてつまらないぢやないか。」

「いや、つまらなかない。」と丑松うすまつは聞入きこれなかつた。「僕は君、是これでも眞面目まじめなんだよ。まあ、聞き給きえ・・勝野君かつのは今、猪子先生いのこのことを野蠻あだ下等あだと言おはれたが、實際じつじやう御説おせつの通りだ。こりゃ僕かの方が勘違かんちがひをして居た。左様さだ、彼の先生せんせいも御説おせつの通りかに獣皮かいぢりでもして、神妙ひつこにして引込んで居れば好あいのだ。それさへして黙あって居れば彼様あな病氣びやうきなぞかに罹かりはしなかつたのだ。その身體からだのことも忘われて了いつて、一日いちにちも休あまらずに社會あと戦あって居るなんて一一何なにといふ狂人きやうじんの態あだらう。噫あ、開化あした高尚あな人は、豫あめ金牌きんぱいを胸むねに掛かける積ありで、教育事業きやういくじぎやうなぞに従事じゆうじして居る。野蠻あな、下等あな人種じんしゆの悲あしき、猪子先生いのこは斯様そんな成功せいこうを夢ゆめにも見みられない。はじめからもう野末のすゑの露つゆと消くえる覺悟かくごだ。死しを決きして人生じんせいの戰場せんじやうに上あって居るのだ。その慨然がいぜんとした心意氣こころいは・・は、、、、、悲あしいぢやないか、勇いさましいぢやないか。」

と丑松うすまつは上齒うはばを顯あらはして、大きおほく口くちを開あいて、身みを慄ふるはせ乍すずら歎なげ咽なくやうに笑うつた。鬱勃うつぱつとした精神しんせいは體軀からだの外部ぐわいぶへ満みち溢あれて、額ひたひは光ほり、頬ほの肉にくも震ふるへ、憤怒ふんぬと苦痛くつうとで紅あかく成なつた時は、其そのの粗野そな沈鬱しんいつな容貌もつとが平素へいそよりも一層いっしやう男性なんせいらしく見みえる。銀之助ぎんすけは不思議ふしぎさうに友達の顔かほを眺ひめて久ひさし振ぶりで若わかく剛いきいきと活な々なとした丑松うすまつの内部うちぶの生命いのちに觸ふれるやうな心こころもちがした。

對手あひてが黙あつて了あつたので、丑松うすまつもそれぎり斯様そんな話わをしなかつた。文平ぶんへいはまた何時いつまでも心こころの激昂おきを制おさへきれないという様子ようす。頭あたまごなしに罵ののらうとして、反ひつて丑松うすまつのために言い敗まられた氣味きみが有あるので、輕蔑けいべつと憎惡にくしみとは猶な更さら容貌かおづきの上うへに表あられる。

「何なにだ・・この穢え多ためが。」とは其そのの怒氣いかりを帶たびた眼まなこが言いつた。聽やつて文平ぶんへいは尋常じんじやう一年いちねんの教師きやうしを窓まどの方かたへ連つれて行いつて、

「奈何どうだい、君きみ、今いまの談話だんわは一一瀬川君せがわは最早もう悉皆すつかり自分で自分の祕密ひみつを自白じはくしたぢやないか。」

斯さう私語ささやいて聞きかせたのである。

丁度あ準教員じゆんきやういんは鉛筆寫生えんぴつしやせいを終まつた。人々ひとびとはいづれも其その周圍まわりへ集あつた。

・教材「破戒」のあらすじ

飯山に暮らす24歳の青年教師瀬川丑松は、師範学校時代からの親友土屋銀之助にも恵まれ充実した生活を送っているが、被差別部落出身である。父は息子のためそれを隠そうと、出身の小諸を離れ縁者とも交際も断ち、烏帽子嶽の麓で独り牧夫をして暮らしている。故郷を離れる時父は丑松に、立身のためにその出自を徹底的に隠すことを戒めとして教える。それまで丑松は父の忠告に無頓着であったが、大日向という被差別部落民が下宿を追われるという事件を契機にその戒めの意味を真剣に考えはじめる。丑松は、自ら被差別部落出身を公言している猪子蓮太郎に深く心酔しており、彼の著書を読んで学習することにより部落差別の不当性への確信を深めるが、まだ自らその解消のために積極的に行動する勇氣はもてないでいる。丑松は校内では校長に次ぐ地位にあり、子どもを自由に伸び伸びと育てたいという教育観をもっているが、教育は規則であると考える教条主義的な校長と対立することも多く、校長は郡視学と謀り、丑松、土屋の両名を学校から追い出し、郡視学の甥の勝野文平をその後釜に据えようと考えている。

突然の事故で亡くなった父の葬儀のため帰省する途中で、偶然丑松は敬愛する猪子蓮太郎に会う。故郷で一緒に食事するなど絆を深め、あらためてその高潔な人格にうたれた丑松は、彼にだけは自らの出身を告白しようとするが、逡巡してとうとう果たせない。往復の道すがらに代議士を目指す高柳利三郎の姿があった。高柳は被差別部落の富豪六左衛門の娘と政略結婚したのである。高柳はそれを知っている丑松に圧力を掛け、丑松が被差別部落出身であるといううわさを流す。

下宿の蓮華寺には風間敬之進の娘で蓮華寺に養女に入った志保がおり、丑松は彼女に恋心を抱いている。下級士族出身で零落した風間は、教員もやめ酒に溺れる毎日を送っており、継母に邪険にされるその息子省吾や風間に丑松はなにくれとなく気を遣い、経済的にも援助する。

高柳の対立候補の、猪子の友人である市村弁護士一行が飯山にやって来る。その応援演説の後、高柳派の暴漢に襲われ、師と仰ぐ猪子が非業の死を遂げる。人生に絶望し自殺まで考えていた丑松は、その死を契機に、父の戒めを破って自分の出身を告白することを決意し、生徒・職員の前で土下座して謝罪する。

丑松の出自についてすでに勝野から聞かされていたという志保は、丑松の誠実な告白を受け、以前から密かに胸に温めていた、丑松と一緒に生涯を暮らそうという思いを銀之助に打ち明ける。大日向はアメリカのテキサスで新しく農業経営を始めようとの計画をもっており、市村弁護士の仲介で丑松もそれに同行するために、教え子たちに惜しまれながら志保とともに飯山を去って行く。

※ 教材として提示した部分は、高柳の流したうわさが真実であることを暴こうとして勝野が職員の前で丑松に対決を挑み、逆に論破される場面である。